

ピータと、
おかあさんと、
はねと



文・栄 亜由夢
絵・別府 貫功

とあるちいさなおうちに、
ひよーのピータとピータの
おかあさんがすんでいました。
ピータはいたずらなひよーで、
いつもおかあさんのしろにはねを
ちぎってはすててしまします。

あるひのことです。

とうとうピータのおかあさんがおーって、
「おうちからでてこきなさい!」

とにかくました。ピーポもそれによひって、
「もうがえってこない!」

ところて、おうちをでてこってしました。
ピータがおうちをでてしまふあるこでこると、

おぞらのうえから、はくちょうのおじさんがあ
やつきました。

「はくちょうのおじさん、こんにちは」

「やあピータ、こんにちは。

やよつもじいてんきだね」



はくちょうのおじさんはピータよりも、

ピータのおあさんよりも、ずっととずっとおおきな
とこで、しくくてきれいなはねをもつたおじさんです。

「ピータはこんなところでなにをしているんだい？」

はくちょうのおじさんにそうきかれ、

ピータはおかあさんのことをおもいだして、
おこりながらいました。

「おかあさんがおこったんだよ。

おうちからでていきなさいっていっただんだ」

「おかあさんはどうしておこったのかな？」

「ぼくがおかあさんはねをちぎっちゃつたからだよ」

ピータがそういうと、

はくちょうのおじさんはおどろきました。

「ピータはどうしてそんなことをしたのかな？」

「ただのこだずらだよ。

そんなことでおこるおかあさんがわるいんだ」

ピータはおこってそういういます。

するとはくちょうのおじさんは、とつぜん、
じぶんのしろくておおきなはねをひろげました。

「ピータ、せなかにのりなさい」

そういわれて、ピータははくちょうの
おじさんはねにのります。

はくちょうのおじさんはピータを

せなかにのせたまま、おもかをとびました。

とてもたかく、とてもはやくとびました。

しばらくおもかをとんだあと、

はくちょうのおじさんは、おおきなおやまでつべんにとまりました。

「ピータ、どうしてこどもにはねがなくて、

おとなにはねがあるかわかるかい？」



「ピータ、わかつたかな?」

「うん。わかつたよ」

ピータがおおきなこえでいうと、

はくちょうのおじさんは、またおおきくわらいました。

「じゃあ、そろそろおうちにかえろうか」

はくちょうのおじさんはそういって、

またしろくておおきなはねをひろげて、おそらくをとびました。

ピータのおうちのまえにつき、

はくちょうのおじさんはゆっくりとピータをせなかからがるしました。

「ピータ、ちゃんとおかあさんにあやまるんだよ?」

はくちょうのおじさんがピータにいふと、ピータは、

「うんー。」

とおおきなこえでへんじをしました。

それをきいて、はくちょうのおじさんは

またおおきなこえでわらいながら、しろくておおきなはねをひろげて、
どーかへととんでいきました。

ピータがおうちにかえると、

おうちにはピータの

おかあさんがいました。

「ただいま!」

ピータがいふと、

おかあさんがこちらをむきました。

「おかあさん、ごめんなさい!」

もうはねをちぎつたりしません!」

ピータはおかあさんにむかつてそういいました。

「もういいのよ。おかあさんもひどいことをいってごめんなさい!」

ピータのおかあさんはピータにそういって、

じぶんのしろくてきれいなはねでピータをつづみました。

おかあさんはねはとてもおさくて、とてもあたたかいはねでした。

